

2021. 12. 2 (木)

## 連帯という運命

岩 淵 功 一

### コロナ禍が促す相互の思いやり

早くも12月になり、一年を振り返る時期になりました。今年もコロナの一年であったと言えるでしょう。この2年間、コロナ禍はこの世界・社会において格差、分断が如何に根深いのかを知らしめました。自己中心的ナショナリズムや排他主義、人種差別を促すことにもなりました。しかし、その一方で、コロナ禍は同じ危機を共有することで、如何に世界はつながっており、私たちは相互に依存していることをあらためて知らしめ、他の人々の苦難をこれまで以上に自分ごととして捉えるきっかけを与えてもれています。他者のために行動することは自分のためにもなるという利他主義が強調されています。医療従事者などコロナ禍の前線で働き続ける人たちへの感謝と称賛、コロナ禍で犠牲になった人たち、経済的に困窮させられた人々への想いが発せられ共有されています。日本も含めた世界各地で多くの人たちがBLM運動に参加して反差別の声を上げてきました。互いを思いやり、手を携えて世界を共に変えていこうとする連帯が広まっているのです。

コロナが拡大した昨年、この希望的な進展は多くの人々の目を惹きつけました。しかし、現在においては、コロナ禍がもたらしたコス

モポリタニズム的な連帯の萌芽はやや忘れかけられているように思えます。時代の変化が早いだけでなく、私たちは飽きっぽいのです。しかし、一度高まった連帯の機運は決して消えてはいないはずで、それをどう育てていくのかを私たち真剣に考えるべきだと思います。

### 多様な生のあり方を肯定する しなやかな連帯へ

先月のチャペルアワーは「共感する力」がテーマで、共感についての色々な考えやエピソードが話されました。ここではとりあえず、共感とは他者の苦難を理解（しよう）して共有する力と定義しましょう。共感という力を培うことはそれ自体が最終目的ではありませんが、連帯に向けたきっかけとして重要な役割を果たします。しかし、最近では感情的な側面が強調される共感への否定的な議論が多く出されています。高みの見物で憐れむ受動的共感、個別事例にだけ同情して広い文脈の問題に注意を払わないスポットライト的共感、いいね！的な仲間内だけに向けられるSNS共感、感情移入・情動的共鳴できないものを拒絶する共感。確かに、こうした類の共感とは人々の幅広い連帯をもたらすもので

はないでしょうし、苦難を被っている人たちが求めているのでもないでしょう。共感を連帯に向けた契機にするには、まず社会的公正の視点を入れ込むことが必要です。社会で構造化・制度化された権力作用が差別や不平等をもたらすことを認識することで、共感個人化・個別事例化されたいっときの情動の高まりだけでなく、継続的に共に行動する連帯につながりうるのです。

とはいえ、連帯することがとても難しい時代です。多くの人が生きづらさを抱えていますが、そのあり方は多様化し個別化しています。その解決も自己責任で取ることが求められています。私たちは自分の生活に精一杯で余裕がなく、他者の苦難への想像力を奪われ、また他者の苦難救済に対してなぜ自分も苦しいのにあいつだけが、という気持ちにもさせられます。そして差別や生きづらさはさまざまなカテゴリーを横断して作用してまいります。私たちが生きづらくする力は私たちが分断する力と手を携えて強く作用しているのです。

連帯というと強い政治的あるいは集団的な団結・結束を思い浮かべるかもしれませんが、もちろんそのような連帯は必要です。しかし、今求められているのは多様な生のあり方を肯定して、誰もが生きやすいように社会のあり方を共に変えていくことに向けた、よりしなやかな連帯です。特定の苦難や利害を共有する集団の強い連帯だけではなく、差異がありながらも、たとえその生き方・価値観・考えを受け入れられなくても、感情的に共感できなくとも、他者が被る社会不公正・不正義に対しては共に抗っていくしなやかな連帯が求められているのです。

## 大学の学びが育む社会的想像力

その土台となるのは他者の苦難を自分事とする社会的想像力です。さまざまな差別や生きづらさは構造的につながっていること、そして、全ての差別・不平等を同時に解消することを目指した対話と協働が必要であることを認識すること。人間に共通する弱さを認めて、いつ自分も同じような状況に陥りかねないことを認めること。立場・経験の違いや相いれなさを認め合いながらも、互いの生きやすさの保障を目指して連帯すること。他者の苦難をもたらす構造的問題に同じ社会に生きる自分も関わっており、どこかでつながり支えあっている差別や生きづらさをもちながら重層的な力を同時に壊していくことで自らも解放して生きやすくなることに気づくこと。そして、誰もが生きやすい社会がもたらす計り知れない生の豊かさを想像すること。こうした想像力を私たちは学ばなければなりません。そして大学こそがまさにそれを学ぶ場なのです。

大学での学びは、これまで知らぬ間に内在化してきた社会の当たり前・普通・正常といった固定観念や思い込みを批判的に向き合う重要な機会です。大学での批判的な学び（捨て）は自らの内面を見つめ直して批判的に捉え返すことで、より対話的で協働的な他者との共生の関係性を模索することを私たちに促します。それは内なる他者と二重の意味で出会う喜びをもたらします。他者は外部ではなく自分の中に存在しています。自らが知らぬ間に抱えてきた自己と他者の不均衡で分断された関係性に気づくことが最初の内なる他者との出会いです。そして、その過程をとおして、これまでとは異なる自己のあり方やひら

かれた他者との関係性と出会うことができるのです。大学はそれを可能にする貴重な場です。ただし、単に講義をふわっと聞いていたり、安易に正解を求めたりするのでは不十分です。文献を精読し、批判的に考え、思考を言語化し、他者と真摯に対話することで、自己と批判的に向き合いながら社会公正をめぐる正解なき根源的な問題を考え続けていかなければなりません。

### 連帯を運命とする

そうした学びは社会をより平等で誰もが生きやすいあり方に変えていく意思を伴います。それは連帯を運命にする意思です。社会学者のパウマンが指摘したように、人々の生き方や価値観が多様化し、変化のスピードが早く、どのような苦難がいつ誰に降りかかるか予測することが難しい時代では、互いの違いをしっかりと認め合って連帯することが自らの生のあり方の保障に不可欠です。連帯は他者の違いを寛容することとは異なります。寛容は多様性や違いをただ他人事として許容する、自己中心的で上から目線の他者理解です。それに対して連帯とは社会志向的であり、他者の苦難を自分事と捉えて、それを解消する取り組みに参加して共に闘おうとすることです。

連帯は運命であるとパウマンは言いまし

た。ここでは運命は destiny という言葉が使われています。日本語では運命と訳されますけど、destiny と fate は異なります。Fate の運命あるいは宿命は所与に定められた、避けられない（主に否定的な）出来事や末路を意味します。Destiny は、将来の成り行きは私たちの能力を超えたコントロールできないものであっても、それは私たちの意思と決断の結果として起きることであり、それゆえそこには責任が伴います。連帯するのは運命です。なぜなら、連帯は与えられた状況の中で私たちが自分自身で最善の道を選択するという主体的行為によってもたらされるのであり、その選択に対して誠実であり続ける意思により責任を持って為されるものだからです。

連帯を運命とするには、かつてイタリアでファシズムに抗した知識人・グラムシの〈知における悲観主義、意思における楽観主義〉が求められていると思います。現状を鵜呑みにしないで自分で吟味して根源的な問題を批判的に思考し、それを変革する強い意思とそれに裏打ちされた希望を持って連帯のあり方を模索し実践していくことです。みなさんが大学での批判的な学びに能動的かつ真剣に取り組み、それぞれのやり方で連帯を運命にして社会に旅立っていられることを心から願っています。

(社会学部教授)